

長唄「五郎」考察

池田 弘一

緒言

本本誠二氏は言われた。「父祖の同族葛藤の犠牲を一身に引き受けて、悲しくも厳しい宿命を負わされ、仇討だけのために生を享けたような曾我兄弟の物語、」（『謡曲ゆかりの古蹟大成』三、第二十五章 曾我兄弟に關する曲）と。

私の思いも同じである。目的を達し、生を終わった後、兄弟は満足をもって眠ったのであろうか。「私の人生って、なんだったのだろうか」と思ったりはしなかったのだろうか。何かが私をこうさせたと思った時、この世にたたらずにはいられない。

鎮魂の思いをこめて「五郎」は明るく唄いたい、吹き払い、晴らすべきは五郎にかかる、ある思いである。この稿では仇討ちのてんまつについて触れなかった。詞章からはずれても書いたのは、仇討ちのかげに泣き、供養に生涯をささげる道のほかに選択肢を与えられなかった女性のことである。

目次

一 長唄「五郎」

- (1) 「五郎」の詞章
 - (2) 成立
 - (3) 八変化なのか、九変化なのか
 - (4) 「五郎」の初演はいつか
 - (5) 中村座出火
 - (6) 「ときむね」の表記
 - (7) 十代目杵屋六左衛門
 - (8) 二代目尾上多見藏
 - (9) 三代目尾上菊五郎
- 二 事項と辞句の考察
- (1) さるほどに
 - (2) 俱不戴天
 - (3) 弥猛心
 - (4) 濡れてくるわ
 - (5) 化粧坂
 - (6) 名うてと聞きし少将の
 - (7) 通ひ通ひておほ磯や

長唄「五郎」考察

- 三 『曾我物語』から
- (8) 大磯
 - (9) 里の諸わけのほだされやすく
雁のつて
 - (10) 十八年の天つ風
 - (11) つばさひらめく胡蝶のごとく
 - (12) 藪のうぐひす
 - (13) 堤の葦鷺草は
 - (14) 実浮いた仲の町
 - (15) 現人神
 - (16) 浅草に開帳ある
 - (17) 『曾我物語』から
 - (1) 『曾我物語』
 - (2) 曾我兄弟
 - (3) 工藤祐経
 - (4) 兄弟の元服
 - (5) 虎のこと
 - (6) 少将のこと
 - (7) 犬房が五郎を打つ
五郎斬られ

(9) 兄弟のたたり、頼朝の処置

四 曾我関連の行事、狂言

(1) 曾我祭

(2) 曾我物

(3) 常磐津「勢獅子」

(4) 曾我の対面

五 大磯をたずねる

(1) 慶覚院

(2) 化粧坂

(3) 延台寺

(4) 鳴立庵

結び

後記

参考資料



五郎・七代目 坂東三津五郎

一 長唄「五郎」

(1) 「五郎（時致）」の詞章

(本調子（序）さるほどに、曾我の五郎、時致は、俱不戴天の父の仇、討たんずものとたゆみなき、弥猛心も春雨に、濡れてくるわの化粧坂、名うてと聞きし少将の（出合方）雨の降る夜も雪の日も、通ひ通ひておほ磯や。（倉）里の諸わけのほだされやすく、誰に一筆、雁のつて。野暮な口説を返す書、粹な手くだについ載せられて、浮気な酒によひの月。晴れてよかろか、晴れぬがよいか、（倉）とかく霞むが春のくせ。いで、オオそれよ、我も亦、（倉）何時か晴らさん父の仇、十八年の天つ風、いま吹き返す念力に、逃さじやらじと勇猛血気。そのありさまは牡丹花に、つばさひらめく胡蝶のごとく、（倉）勇ましくもまた、健気なり。（二上り）藪のうぐひす気ままに鳴いて、（倉）うらやましざの庭の梅。（倉）あれ、そよそよと、春風が、浮名たたせに、吹き送る。堤のすみれ、さいたづま

（さぎ草は）、露のなさに濡れた同士、色と恋との実くらべ、実、浮いた仲の町。よしやよし。（倉）孝勇無双のいさほしは、現人神と末の代も、恐れ崇めて今年また、花のお江戸の浅草に、（倉）開帳あるぞ賑はしき。

(2) 成立

歌舞伎年表の天保十二年（一八四一）に次のようにある。

七月五日より、中村座、「天竺徳兵衛



絵番付

万里入船」。徳兵衛、松崎検校、大工六三、高橋助市郎、佐市郎死霊、太日丸、滝の精、七役（多見蔵）へ中略▽第二番目所作事「八重九重花姿絵」。常わづ、富本、長唄はやし連中。五郎時宗（若衆）、けいこ娘、吉原鳶の者、唐女、雷、漁師、狂乱、瓢箪鯨、右八景（多見蔵）。

一番目は、天竺徳兵衛師匠梅幸より伝来の狂言にて評よし。大詰水中の早替り。二番目、怪談せわ狂言、九変化所作事、水仕掛大道具。大工六三は、師匠の持前にて、松朝上手といへども、江戸子腹には中々あはず。木琴の座頭を検校でいき、上使の上下を唐装束に変へたるはよし。大切、雷の宙乗り、手練大に評よし。

早稲田大学演劇博物館蔵絵本番附朱筆書入れ（清川重春書入れか）には次のようにある。

天保十二年辛丑七月十一日より 中村座 「天竺徳兵万里船（てんぢくとかくべいばんりのいりふね）」
（裏表紙）

九変化所作事 はじめ狂乱 常磐津長唄かけ合 第二 あみ打 富本 第三 西王母 長うた 第四 かみ
なり 第五 鳥羽絵 常磐津 残り時致 娘 茶や廻り 六三の鯉 以上四ツハアツカリニナル
十七日十八日小網丁のけんくわにて十九日より興行仕候

また「七月十一日より」を「十五日より」に訂正している。

石塚豊芥子「花江都歌舞妓年代記続編卷の十五」（新群書類従）は、
天保十二年辛丑年

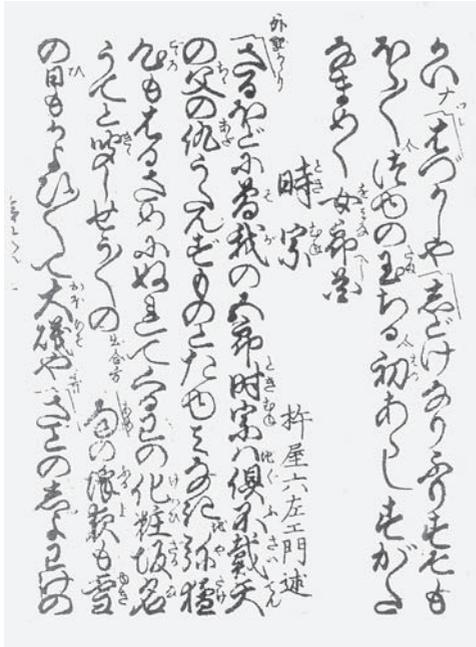
○七月五日より中村座「天竺徳兵衛万里入船」、第弐ばんめ大切所作事「まだ深山木の届かぬながら不束な枝
ぶり 八重九重花姿絵」五郎時宗、若衆、けいこ娘、吉原の鳶の者、唐女、かみなり、りやうし、瓢箪鯰、狂
乱 右八変化《尾上多見蔵》相つとむ。とする。

(3) 八変化なのか、九変化なのか

「八重九重花姿絵」の内容展開について古井戸秀夫は「舞踊手帖」（平成二年 駈々堂出版）で次のように述
べている。

漢の武帝が描いた鯉魚の一軸という重宝がある。（中略）その絵の中の鯉が抜け出して川へ逃げてしまふ。
大工の六三郎は、その鯉を追って川へ飛び込み、「鯉つかみ」と呼ばれる鯉との格闘になる。その時、鯉の口から、
かつて鯉が飲み込んだ人物が一人一人出てきて踊りになる。（中略）八役に変わって、最後には大工の六三郎
に戻って「鯉つかみ」になる。（中略）三代目尾上菊五郎譲りの音羽屋の当り芸を並べたもので、九変化では、
菊五郎の当り役「保名」の狂乱や、雲の上の「雷」が川に落ち「水中の早替り」で「鳥羽絵」になるといふケ

長唄「五郎」考察



沢村屋利兵衛版正本

(三日目) 出火して市村座と共に焼失す。

当十月六日夜(七日暁七ツ半)、中村座楽屋より出火にて、両座并操両座焼失(火元、表向は堺町水茶屋櫻屋喜右衛門と申上候)。しかるに十月廿日、芝居操座并茶屋、其外堺丁葺屋町住居の者、一同普請見合せべく旨、樽三右衛門より達有之候。

*白猿 〓 当時海老蔵、前七代目団十郎。

この出火の件について松林たかねは「長唄鑑賞手びき」(『演芸画報』昭和十三年五月号)で「此年十月七日、然も多見蔵の部屋から出火して中村座も市村座も焼失」と述べている。

この事件は天保十三年の三座移転へとつながっていく。現在の中央区日本橋にほど近いところにあつた芝居は姿を消すことになった、その最後の舞台とも言ふべきものが多見蔵の芝居で、その中に私の好きな「五郎」があつたのである。

(6) 「ときむね」の表記

現在の諸本には「時宗」の表記は見かけないが、沢村屋利兵衛版の正本は曲名を「時宗」とし、曲中の詞章も「さるほどに曾我五郎時宗は」と表記している。仮名十二巻本の『曾我物語』を見ると、多くは「時致」だが巻第十以

降では「時宗・時致」が共に用いられている。巻第十で、犬房が五郎を扇で打つ場面にも「時宗・打ち笑ひ」とある。新日本古典文学大系『謡曲百番』（底本、寛永七年黒沢源太郎刊観世黒雪正本）の「小袖曾我」、「夜討曾我」は「時宗」であり、近松の『世継曾我』でももっぱら「時宗」である。

そうしたところから考えると正本の「時宗」という表記は、誤りとか誤写とかいうものではなく、先行のどこかの作品の表記にならったものとみるべきであろう。

(7) 十代目杵屋六左衛門

寛政十二年（一八〇〇）、九代六左衛門の次男として誕生。兄の夭折によって家督を相続し、四代三郎助を襲名。さらに文政十三年（天保元年・一八三〇）、十代六左衛門を襲名、中村座囃子頭となる。安政五年（一八五八）、江戸に流行したコレラにより八月十六日没。五十九歳であった。舞台生活は四十年に及び、演奏・作曲の両面での活躍はめざましく、後世への寄与も多大であり、四代杵屋六三郎と共に長唄中興の祖と称される人物である。

今日なお流行曲としてもはやされている曲に次のようなものがある。ほぼ作曲年代順に列記する。

外記猿・傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰・賤機帯・角兵衛・石橋・翁千歳三番叟・官女・喜撰・傀儡師・巽八景・助六・五郎・秋色種・常磐の庭・鶴亀・末広狩。

(8) 二代目尾上多見蔵

寛政一一年（明治一九年（二七九九）一八八六）。京都生まれ。俳名は松朝。幼くして三代瀬川菊之丞の門弟となり、のち三代中村歌右衛門の門に移る。文政三年（一八二〇）堺の大寺芝居で三代尾上菊五郎と同座したのが縁で門人となり、その年の十一月江戸河原崎座に出勤して、二代尾上多見蔵を襲名。三都を往来して嘉永五年（一八五二）「大上上吉」に位づけされた。和事・実事・敵役・女方のほか、踊りにも秀いで、また早替り、

怪談物を得意として、番付に「兼ル」と書かれた。当時としては稀れにみる長寿で、それにあやかろうと子供を多見蔵の出ている芝居に連れていくことがはやったという。

(9) 三代目尾上菊五郎

天明四年（嘉永二年（一七八四）一八四九）。江戸生まれ。俳名は梅幸・三朝・梅寿。初代菊五郎の高弟初代尾上松助の養子となる。文化六年（一八〇九）二代松助を継ぎ、文化十一年十一月からは俳名を芸名として三代尾上梅幸。翌十二年十一月に三代菊五郎を襲名。長く江戸劇壇を代表する俳優として活躍した。容姿にすぐれ、和事・実事・敵役・女方の広い芸域を兼ね、「四谷怪談」のお岩・小平・与茂七にみられるように、四代鶴屋南北の怪談狂言や早替りも得意芸であった。俳名から梅寿菊五郎と呼ばれる。

二 事項と辞句の考察

(1) さるほどに（然る程に）

そうしているうちに。前の内容を受けて、次に起こる事柄を述べるときに用いる。②さて。ところで。語り物などの冒頭や、話題を転換するとき用いる。ここでは②の用法。

(2) 俱不戴天

俱ともに天を戴いたかず 『礼記』(曲礼上)に「父の讐あだは与とも共に天を戴いたかず」とある。同時にこの世に生存することを望まないこと。深い恨みのある仇敵に対していう。

「不ふ同戴た天」ともいう。「俱不戴とも天の敵を討ち、名を後代にあげんこと」（近松・曾我会稽山）とある。「不ふ俱戴とも天」（俱ともには天を戴いたかず。部分否定、「俱不戴とも天」（俱ともに天を戴いたかず。全部否定）。父の敵とはこの世にもとは生きていくことはできない。という意味から「不ふ俱戴とも天」と唄うべきだと説く人もいる。理になっっている。しかし、私は思う。外記ガカリで「さるほどに曾我の五郎時致は」と唄い、地に進むのに「ふぐたい

てん」ではいかにも曲趣にかなわない。「ぐふたいてん」と強く続ける、私はそう思い唄う。「ぐふさいてん」と唄った時期もあったようだ。正本での「戴」(載)は字体が明確でないが「さい」と読みがながついている。これについては三代杵屋勘五郎が『長歌露の転文』(明治八年八月)の中で「たい」に修正している。

(3) 弥猛心やたげこころ

いよゝ勇み立つ心。思いはやる気持ち。「やたけ」は「いやたけ(弥猛)」の変化した語。

(4) 濡れてくるわ

「春雨」の縁で「濡れて」と言い、「来る」に「廓」を掛けている。「助六」に、「傘さして、濡れに廓の夜の雨」とある。したがってこの「濡れ」はただに雨に濡れるというという意味だけで唄うべき語ではない。

(5) 化粧坂

「くるわの化粧坂」とあるのだから「化粧坂」は廓の名なり所在地なりになる。多くの解説書はこの「化粧坂」を鎌倉のもののようにしているが私はとらない。鎌倉のそれは扇ガ谷の海蔵寺の手前を左に入り、やがて源氏山、葛原ガ岡に至る急坂であり、切通しの一つに数えられている。坂の入口には説明板がたち、斬り落とした首を化粧してさらした所だとか、近くに遊郭があった所だったから、という趣きのことが書いてある。「物語の舞台を歩く 曾我物語 坂井孝一 山川出版社、八一頁」に次のようにある。「高来神社をでて、大磯駅のほうに少しいくと、化粧坂交差点にでる。この辺りは宿の東の入口であり、国道沿いのほかの場所とは違って今も松の並木が植えられている。虎が化粧をしたと伝えられる化粧井戸も、その松並木のなかにある。」

(6) 名うてと聞きし少将の

「名うて」、世に名高いこと。評判の高いこと。名代。「勢州屋質兵衛とて近所名うての堅親父」(『花暦八

笑人』。芝居の世界では「少将」は「化粧坂の少将」とされ、五郎の敵娼あいかたであり、愛人である。『曾我物語』に「化粧坂の下に、遊君あり、時致、情をかけ、あさからず思ひしに、」（巻第五 五郎、女に情かけし事）とあるが、「少将」の名はない。「少将」の名の出ているのは巻第六の「大磯の盃論の事」の中で、「黄瀬川に亀鶴、手越てこに少将、大磯に虎とて、海道一の遊君ぞかし」とある。これらがもとで「化粧坂の少将」の名が芝居・音曲の世界に定着したのであろう。

「五郎」の中での「少将」には中国の「瀟湘」を聞かせている。瀟湘は瀟水と湘水の二つの河川であり、湘水は湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ。瀟水はその支流。その二つの流れの周辺の美景の地、八か所を選んで「瀟湘八景」と唱え、南画の画題として世に知られる。その中の一つが「瀟水の夜雨」である。これが「出の合方」をはさんで、「うわさに高い瀟湘（少将）の雨の降る夜も」と続くのである。この「雨」は「虎が雨」の故事を持ち込んだものとし、あとの「晴れてよかろか、晴れぬがよいか。とかく霞むが春のくせ」の伏線となり、「いで、オオそれよ、我も亦、何時か晴らさん」の重要な前書きになる。という説もある。

陰曆五月二十八日に降る雨を「虎が雨」「虎が涙雨」「曾我の雨」と言い、夏の季語にも入っている。十郎祐成の愛人大磯の虎がその死を悲しんで流した涙がこの日雨に変わって降るといふ。「頃しも五月二十八日、空さみだるる黄昏の、虎が涙や少将のよるの雨さへしきりになるに」（浄瑠璃・百日曾我）といった用例もある。

しかし、私は作者・役者・振付師はさほどに「虎が雨」を思っていないなかつたと考ええる。変化所作事のひとこまに登場する「五郎」に「助六」の姿と意気と粹を重ね合わせて書き、節付けし手付けをした。だから「五郎」の濡れる雨は「春雨」でなければならず、「涙雨」ではありえない。そしてかざす傘は雨ならぬ「濡れ」をいとう心の傘。だから助六のさす傘も五郎のさす傘もあはした洒落れた傘、定九郎のとは違うのだ。

「げにや五月あつきのこの夜さり、むかし偲べと降る雨を、虎が雨とぞ言ひ伝ふ、涙の徳こそめでたけれ。」で結ぶ『虎

少将道行』という曲がある。作詞者は中内蝶二、作曲者は四代目吉住小三郎、三代目杵屋六四郎。明治四十五年五月、長唄研精会で発表された。

「五郎」とは全く性格の異なる曲だから比較のしようもないが、時代の相違、それぞれの時代の特質をしみじみと感ずる。天保の改革と弾圧寸前の天保十二年という洒落に洒落た時代。それに対して明治という、ある大きな流れをもって走り出した時代。そこに生まれた曲の中に、それぞれの時代の生きた長唄人、それを歓迎した聞き手の思いを感じる。

(7) 通ひ通ひておほ磯や

「通ひ通ひて」の「通ふ」はここでは女のもとに通うこと。「おほ磯」の「おほ」には「逢ふ・会ふ」の意がかけられている。

(8) 大磯

現、神奈川県大磯町。平安時代には相模国国府の所在地。慶長六年（一六〇二）東海道の宿駅に指定された。『吾妻鏡』建仁元年（一一〇二）六月一日の条には、源頼家が大磯に宿し、遊君を召して歌曲の宴を催す記述があり、当時遊女がいたことがわかる。また、文明十八年（一四八六）聖護院道興准后東国巡歴の『廻国雜記』に「大磯の宿といへる所はいにしへ（鹿）といひける好色のすみける所となん、ある同行にたはぶれに申しきかせる」として、「今は又とらふすの（野辺）へとあれにけり人は昔のおほいその里」と詠んでいる。

文政八年（一八二五）六月には関東取締出役は東海道諸駅の飯盛女の取締まりを行なったが、当駅については飯盛女が昼夜の差別もなく宿内をさわぎ歩き、ことさらいかかわしい風儀にて往帰するとして、とくに風俗を改めるように申し渡している。（『五街道取締書物類寄下』）。

なお「大磯」は「小磯」と対（つ）に見えることが多い。南郷丸丸のせりふにも「大磯小磯小田原かけ」とある。

(9) 里の諸わけのほだされやすく

「里」は「廓」^{やま}、「諸わけ」は遊里語。遊里でのいろくな約束事。恋のかけひき。対人関係のとりさばきなどをいう。そうした諸分を心得、通じているのが「訳知り」である。「ほだされ」の「ほだす」は、つなぎとめる、束縛する。もともと「ほだし」は馬具で、馬の足などにかからませて歩けないようにする綱。転じて人の身を束縛するもの、手かせ・足かせの意に用いる。

(10) 雁のつて

匈奴に捕らえられ、死んだとされていた將軍蘇武が雁の足に結び付けた手紙が漢の帝に届いて、助けられたという漢書^{かんじョ}の故事によって、手紙。便りを「雁の玉章」^{たまづせ}、「雁の便り」^{たまたま}、「雁の使ひ」などと言う。「巽八景」には「せめて恨みて玉章を薄墨に書く雁の文字」。常磐津「廓八景」には「琴柱^{ことぢ}に落つる雁がねは、君が堅田の文使ひ」。長唄「両国八景」には「連れだち落つる雁の声。(二上り) たよりうれしき玉章も」。富本「俠容形近江八景」の小さいなのクドキには「堅田に落つる雁がねの、文の便りですましても。」などとあるように江戸の音曲では少しずつ形を変えて流用している。

「里の諸わけ」から「春のくせ」まではクドキ。春雨の夜、五郎は少将からの文を手にして廓に向かう。クドキといっても相手がそこにおいて、それに向かつての「口舌・口説」(くぜち・くぜつ)ではない。天紅^{てんこう}の文を繰りつつ五郎は恋心をクドキの曲節にのせて訴えるのである。「五条坂の景清」は阿古屋のいないところで恋を語り、「琴責めの阿古屋」は景清のいない裁きの庭で恋心を訴える。「よひの月」の「よひ」は「酔ひ」と「宵」の掛けことば。

(11) 十八年の天つ風

「天つ風」は天空を吹く風。『古今集』に「天つ風雲の通ひ路吹き閉ちよをとめの姿しばしとどめむ」(雑上・

八七二」とある。空を吹きわたる風は十八年めに今までとは逆の方向に吹き返すという。仇を報いる時にいまめぐり合うとの意をこめた表現。父の祐泰の死は安元二年（一一七六）、仇を報じたのは建久四年（一一九三）、その間ほぼ十八年。

(12) つばさひらめく胡蝶のごとく

黒縹子へ金糸と色糸とで蝶の模様を縫いとりした、フキの厚い着付が五郎のこしらえ。「胡蝶のごとく」のあと「勇ましくも」の間に弾かれる「勢ガカリ」は曲趣をよく表しており、印象的である。

(13) 藪のうぐいす

藪にいうぐいす。野山にいうぐいす。『鈴ヶ森』の長兵衛は「阿波座鳥は浪花濁、藪うぐいすは京育ち、吉原雀を羽交につけ、」と言う。そんなところから「気ままに鳴いて」いる藪うぐいすは、ひよつとして多見蔵自身ではなかるうかと思う。京生まれの多見蔵が江戸の舞台に闊達自在に踊っているのである。これは私の根拠をもたぬ思いである。

(14) 堤の葦鷺草は

三代杵屋勘五郎はこれを「堤のすみれさいたづま」と改めている。『長歌露の転文』（明治八年八月）の中でこのことである。なぜ改めたのであろうか。『増補俳諧歳時記采章』（曲亭馬琴編、藍亭青藍補）によると「葦」は春之部三月に記載されており、「鷺草」は夏之部六月に「和漢三才図会」から引いて、「奥州処々に鷺草あり。春苗を生ず。麦の嫩苗の如し。高さ尺ばかり。六月、茎を抽んで花を開く」とある。葦の花は紫、鷺草の花は白。咲く季節が異なる。そんなところから勘五郎は春之部二月に記載されている「さいたづま（虎杖）」に改めたのではなかるうか。『後拾遺集』に、「三月ばかりに野の草をよみ侍りける 藤原義孝 野べみればやよひの月のはつるまでまだうらわかきさいたづまかな」とある。

春の野に萌える草と思えば「すみれ鷲草」でよく、咲いている花とすれば「すみれさいたま」が適切とならうか。

(15) 実じ浮いた仲の町

「浮いた」は、陽気な、うきうきとした、といった意味。浮ついている、移りやすい、の意ではない。「浮いた仲」といい、「仲」に「仲の町」の「なか」をかけている。「仲の町」は吉原の大門より正面の行止まり水道尻までの大通りをいうのだが、ここでは吉原のさとを指している。大磯の廓通いのはずがいつか吉原の廓の気分になる。

(16) 現人神

① 仮に人の姿となつてこの世に現われた神。② 天皇。③ 靈験あらたかで随時姿を現わして威力を發揮する神。などの意に用いられるが、ここでは③の意。「あら」は「荒」の意がこめられている。兄弟は荒人神として箱根権現境内をはじめとして由縁の地に祀られている。

(17) 浅草に開帳ある

「開帳」とは、寺社の本尊神体を目を限つて開帳して拝観させる行事をいい、その寺社における開帳を「居開帳」、他国より出府しての開帳を「出開帳」という。この場合は本所回向院、深川永代寺、湯島天神などを借用した出開帳の一つ。開帳にはその寺社伝来の宝物を展示するのが恒例で、また人寄せのため種々の造り物をこしらえて飾つた。

松林たかね『長唄鑑賞手びき』（『演芸画報』昭和十三年五月号）に「浅草の観音堂の後うしろへ行くと、大震災前迄、ここに念仏堂というのがありました。（中略）天保十二年六月、この念仏堂に箱根現人神の開帳があり、其時出来たのが「五郎」で、とある。この時、境内には、大坂の細工人、柳文三作の瀬戸物細工が見世物として出るなど、たいそう賑わつたという。その出開帳の期間はわからないが、もし七月にまでかかっていたとした

ならば、中村座の「五郎」は出開帳の当て込みというだけでなく、タイアップのねらいも感じられてくる。山東京伝の『世上洒落見絵図』に「今時開帳なども信心で詣る者は少なく、やれ水茶屋によい娘が出るの、取持ちに役者が出るのといふ評判を聞き、それを見に参拝する事なれば、」とある。想像をたくましくすれば、六月の出開帳に多見蔵が、あるいは十代六左衛門が詣っていたかも知れないし、力を貸していたかも知れない。そんなことを考えると、この「五郎」が興行中「アツカリ」のまままで終わったとは思いたくない。出幕になった日、中村座では、出開帳に集った善男善女が多見蔵の「五郎」に声援をおくったであろう姿が目につかぶ。

三 『曾我物語』から

(1) 『曾我物語』

作者・成立年代不詳。一四世紀後半から十五世紀始めのころの成立かといわれる。曾我兄弟が仇討ちを果たした建久四年（一一九三）から時を隔てての作品である。仇討物語であると共に鎮魂が主題となっている語り物である。諸本は真名(字)本・仮名本の二つに大別される。一〇巻。仮名本系の流布本は十二巻。謡曲や歌舞伎・近世音楽・小説などに素材を提供し、「曾我物」を生んだ。

(2) 曾我兄弟

曾我十郎祐成・五郎時致の兄弟。鎌倉初期の武士。父河津祐泰が安元二年（一一七六）に一族の工藤祐経に暗殺されたのち、母の再嫁先の相模国曾我荘（現、神奈川県小田原市）で養育され、継父の名字曾我を称し、成人後は北条時政の庇護下にあつたらしい。建久四年（一一九三）富士の巻狩の際、父の敵祐経を殺害。祐成は仁田忠常に討たれるが、時致はさらに源頼朝の宿所襲撃をはかり、捕らえられ死罪となる。

(3) 工藤祐経

平安末く鎌倉初期の武将。左衛門尉。伊豆国住人。祐経の子。京に上り平重盛に仕えるが、その間に一族の

伊東祐親に伊豆国伊東荘（現、静岡県伊東市）を奪われる。安元二年（一一七六）その恨みから従者に命じて祐親嫡子河津祐泰を暗殺。元暦元年（一一八四）以前、関東に下り源頼朝に仕え、平家追討や奥州合戦にも参加した。在京中に養った文化的教養から頼朝に厚く信任され、囚人として鎌倉に下った平重衡の接待を命じられたり、源義経の妾静が鶴岡八幡宮社頭で舞った際には鼓を奏したりした。建久四年（一一九三）富士の巻狩の折、河津祐泰の遺児曾我兄弟に父の敵として殺害された。五月二八日。

(4) 兄弟の元服

仮名本巻第四の冒頭に（十郎元服の事）として、次のようになる。

光陰をしむべし、時人をまたざる理、隙ゆく駒、つながぬ月日かさなりて、一萬は十三歳になりける。身の不祥なるに、また、公方をはばかりる事なれば、ひそかに元服して、継父の名をとり、曾我十郎祐成となのりける。

継父は曾我太郎祐信である。河津三郎祐重の死を語る巻第一（河津がうたれし事）には

男子二人有り。兄は一萬とて、五なり、弟は、箱王とて、三にぞなりにける。

とある。箱王が十七になり、出家をきらって曾我へくだつて来た時、十郎は箱王を北条時政のもとへ連れて行く。元服に際しての烏帽子親になつてもらつたためである。時政は「時政が子と申さん」と言い、箱王の髪を切り、烏帽子を着せて、曾我五郎時致となのらせた。

吾妻鏡建久元年九月七日の条に「甚雨入夜故祐親法師孫子祐成（号「曾我十郎」）、相「具弟童形」（号「管王」）。参「北条殿」。於「御前」令「遂元服」。号「曾我五郎時致」とある。

坂井孝一氏は、「快く承諾した時政は、自分の名前の一字「時」を与え、また自分の嫡子の『四郎』義時に準ずる意味をこめて『五郎時致』と名乗らせたのであった。」と解説されている。（『曾我物語』、山川出版社）これに従えば時致が「五郎」と呼ばれるいわれははっきりする。それでは兄祐成はなぜ「十郎」と呼ばれるの

であろうか。わからない。

(5) 虎のこと

『曾我物語』 仮名十二卷本巻第四(大磯の虎思ひそむる事)に、「大磯の長者の女虎むすめといひて、十七歳になりける傾城を、祐成の、年ごろおもひそめて、ひそかに三年みとせぞかよひける。」とある。真字本によると、民部権少輔基成の乳母子の宮内判官家長が、平治の乱のために東国に落ちのび、平塚宿の夜叉王という傾城に通つて、三虎御前という女子をもうけた。大磯宿の長者で菊鶴という傾城が、その三虎御前を養つたという。長者は、宿場の遊女の長をさす。さらに「席とと十七歳自とと十郎貳拾年」通初、年三年間、断金契不レ浅」とある。

巻第四(虎を具して、曾我へゆきし事)には、「かくて、月日をおくりけるが、さだむる妻もつべからずとて、ただ虎が情なまけばかりにひかれて折々かよひなれける。」とあり、十郎との交情がなみなみのもでなかつたことが語られている。

巻第十一・第十二には仇討の後日譚である。その中心にあるのが虎であるようだ。

虎は曾我の里に兄弟の母をたずね、共に箱根権現に参り、仏事を営み、出家する。その後、箱根を出て富士の裾、井出の跡、十郎・五郎最期の跡を弔う。手越(静岡市内、安倍川の西岸の古駅)の宿で手越の少将に会う。少将は「花の袂をぬぎかへて、こき墨染にあらためつつ」、二十七歳で出家し、手越の宿を出る。二人は連れ立って諸国を修行し、信濃の善光寺に一兩年とどまり、やがて都にのほって法然上人に会つたという。法然に会つたという話は真字本にない。虎が善光寺に参つたことだけは、『吾妻鏡』建久四年六月十八日の条に記され、真字本にも語られている。

「虎、さすがに古里やこひしかりけん、又、十郎のあたりほとりやなつかしく思ひけん」大磯に帰り、高麗寺の山の奥に入り、「二人の尼、一庵ひつはりに床ゆかをならべ、おこなひすましてぞ候ひける。」とある。兄弟の母は二宮にのみや

の姉をともなつて高麗寺の山の奥の庵を尋ねる。この物語も真字本にはなく、平家物語灌頂卷「大原御幸」の趣向にならつたものかと言われている。(母、二宮ゆきわかれし事)が仮名十二卷本の最終の章であり、「虎峰に上りて、花をつめば、少将、谷にくだりて、水をむすび、一人、花をそなふれば、一人は、香をたき、ともに一仏浄土の縁を結ぶ。」といった生活を続け、「かかりし程に、二人の尼、行業つもり、七旬の齢たけ、五月の末つ方、少将少悩して、西にむかひ、肩をならべ、膝をくみ、端座合掌して、念仏百返となへて、一心不乱にして、音楽雲にきこえ、異香薫じて、聖衆来迎し給ひて、ねむるがごとく、往生の素懐をとげにけり。」とある。

真字本の記述によれば、虎は庭の桜の小枝の下に十郎の姿を見、走り寄つてすがりつく姿は消えて、虎は倒れ、その時から病いつき、少将は「為^二少病少悩^一、生年申^三六十四歳^一、遂^二大往生^一。」とある。なぜか虎の没年の記述はない。一般に寛元三年(一二四五)七十一歳で没したとされる。

(6) 少将のこと

巻第五(五郎、女に情かけし事)には、「時致も、化粧坂の下に、しりたる者の候。」「化粧坂の下に、遊君あり、時致、情をかけ、あさからず思ひにし、」とあるが「少将」の名は出てこない。巻第六(大磯の盃論の事)の和田義盛の言葉に「都の事はそのかぎりあり、田舎辺には、黄瀬川に亀鶴、手越に少将、大磯に虎とて、海道一の遊君ぞかし。」とある。しかし、「化粧坂の少将」とは言っていない。

五郎が情をかけた女は梶原源太にも思われたようだ。女をたずねた五郎はせかれて会えない。「あふと見る夢路にとまる宿もがなつらきことばにまたもかへらん」の歌を残して帰る。その後、「景季がまことの妻女になるべき身にもなし、来世こそつひのすみかなれ。」と女は世を観じて出家する。「生年十六歳と申すに出家して、諸国を修行して、後には、大磯の虎がすみ家をたづね、道心に行して、いづれも八十余にして、往生の

素懐をとげにけり」とあるが、ここにも「少将」の名はなく、化粧坂の文字もない。そして、十一巻・十二巻の記述とも相違する。『曾我物語』の中で五郎が思いをかけた女は手越の少将であったのだ。それがなぜ「化粧坂の少将」になったのであろうか。近松門左衛門の『世継曾我』にははつきりとその名が出てくる。しかも虎・少将のつき合いは出家後に始まるのではなく、傾城のころからのものである。第二の化粧坂の遊里の場面は二人が曾我兄弟に馴染んだ昔を語るもので、「夜毎にかはる憂き枕。つらきながらも勤めとて、朝な夕なの化粧坂。むざんやな少将は五郎に深く相生の、松は根ごとと頭はれて、」のようにある。

『世継曾我』の第三には、「虎・少将道行」があり、曾我の里に母親をたずねた二人は、形見の烏帽子と直垂を着て兄弟に見せかけ、病中の母の前で「十番切」を語ることに。虎との間の忘れ形見「祐若」という世継がいたことがわかることなどが語られる。第五では頼朝の面前に召し出され、祐若には先祖の知行地が与えられ、虎・少将は御台の求めに従って遊里のさまや遊女の切なさを調べ奏で舞う。「かくておいとま給はりて、親子ともなひ立ちかへり、富貴ふつきの家と成りにけり。げに有り難き忠孝の威徳は千秋万々歳、めでたかりともなか／＼申すばかりはなかりけり。」これが『世継曾我』の結びである。こうした作品の影響のもと、曾我兄弟の物語の中に「化粧坂の少将」は定着し、「十郎と虎」と対つをなして「五郎と少将」の名が語られるようになったと思われる。芸能の世界・舞台では「虎・少将」が顔を揃え、名を列ねることは常識になっていったが、後代に付加した部分が多いだけに遺跡・旧跡の類は虎のそれとくらぶべくもない。

(7) 犬房が五郎を打つ

捕らえられた五郎を頼朝が自ら尋問する。五郎はひるむ様子もなく堂々と受け答える。そこに走り出たのが祐経の嫡子犬房九歳。扇をもってさんさんに五郎を打つ。「その年の程にて、よくこそ思ひよいたれ。うてやうてや、打つべし打つべし、犬房よ。われわれも、幼少にして、なんぢが親に、父をうたせぬ。年ごろの思

ひ、いかばかりぞや。今さら思ひ知られたり」と五郎は打たれるにまかせ、「なんぢは、いみじき生まれ性にて、昨夜うちたる親の敵を、ただ今心のままにすることのうらやましきよ」と言う。

このへんのやりとりは歌舞伎十八番の内の「助六由縁江戸桜」に取り込まれている。この世界では、助六実は曾我五郎時致なのである。

揚巻の裾に隠れていた助六を引き出して意休が扇で打つ。その手を取つての助六のせりふ。

「意休、わりヤアあやかり者だ。汝が今申す通り、我々兄弟十八年つけねらへど、今もつて敵も討たれず。それに引替へこの助六は、そちが為には恋の敵、その敵を眼前に、扇にて打ち、敵を討つとはうらやましい。あやかりたい。我に教訓の扇の言ひ、母の紙子に手向ひならぬこの時致。ぶてたたけ、ぶつて腹だに在るならば、いくらもぶてよ髭の意休」

(8) 五郎斬られ

頼朝は言う、汝の言うことは一々納得がいった。死罪を許して召し使いたくも思うが、世間のそねみもあるうし、祐経には親族が多いからその恨みからのがれられまい。そこで今後のために汝を誅すと。さらに次のよう言葉が続ける。

「うらみを残すべからず。母が事をぞ思ひおくらん、いかにもふびんにあたるべし。心やすく思へ」とて、御硯を召し寄せ、「曾我の別所二百余町を、かれら兄弟が追善のために、頼朝一期、母一期」と、自筆に御判を下され、五郎にただかせ、母が方へぞ送られける。

五郎は斬られることになった。御馬屋の小平次がその任に当たるはずであったが、大房のたつての願いで祐経の弟伊豆二郎祐兼に身柄がわたされた。松崎（静岡県賀茂郡松崎町か）の浜に引きすえられた五郎は斬ろうとする祐兼に「かまへてよくきり候へ。人もこそ見るに、あしくきり給ひ候はば、悪霊となりて、七代までと*

るべし（*とり殺すぞ）」と言う。祐兼はおびえて斬り得ない。ここに出てきたのが筑紫の仲太なかたという男。これは祐経をたよりとして訴訟をおこしていた男。祐経が討たれたことで訴訟が不首尾になったことを兄弟のせいだと思ひ込み、斬首の役を引き受けた。

「わざと太刀にてはきらで、苦痛をさせんために、にぶき刀かたなにて、かき首にこそしたりけれ」と『曽我物語』（巻第十）は伝える。これでは五郎がたたらぬはずはない。このへんの本文に「時宗見かへり」のように「時宗」という用字が目につく。注には「時致」にあたる。とある。これが長唄「時致」に「時宗」という用字で出てくるもとでもあろうか。

さて、伊豆二郎は不覚人として奥州外浜そとのはまへ流された。「いくほどなくて、悪しき病をうけて、当年の九月に廿七歳にしてうせにけり。これひとへに、五郎がいきどほりむくふ所にやと、口びるをかへさぬはなかりけり。時致は、五月にきらられければ、祐兼は、九月にうせにけり。不思議なる例たぬし、因果歴然とぞ見えける。」と「伊豆二郎が流されし事」は文を結んでいる。

(9) 兄弟のたたり、頼朝の処置

富士の裾野の狩も過ぎ、建物の類もとりはらわれて元の野原にもどった。そこに残ったものといったら兄弟の曠悲執心しんみ、いかりと恨み、ある時は「五郎時致」と、ある時は「十郎祐成」と名乗り呼ばわる声が響き、戦い争う音が昼夜となく続く。この様子を聞いた者はたちまちに死んだ。やつと命をとりとめた者は狂人となり、兄弟の霊が憑いて苦悩を訴えるのだった。

それを頼朝は聞き、遊行上人を請じてなすべき方法を尋ねた。上人は菅原道真、平将門、藤原仲成の例をひき、神とあがめまつることを説く。頼朝はしかるべしと判断をくだす。

すなわち勝名荒人宮せうめひくわつじんぐうとあがめたてまつり、やがて富士の裾野に、まつかぜ（「松陰」、「せういん」、静岡県駿

東郡原町の松蔭寺にあたるか。)といふ所を、ながく御寄進ありけり。よつて、かの上人を開山として、寺僧をさだめ、禰宜・神主をすゑ、五月廿八日には、ことに読経、神楽、いろいろの奉幣をささぐる事、今にたえず。それよりして、かの所のたたかひたえて、仏果を証するよし、神人(神官)の夢に見えけり。(巻第十一 兄弟、神にははるる事)

兄弟が神と祝われることについて「曾我両社八幡宮并虎御前観音縁起」に次のようにある。

建久八年四月、將軍のたまひけるは、富士にて死にける曾我兄弟、我に恨みをふくむ由、夢に度々見ゆるなり。殊更無双の勇士孝行の者なれば、兄弟を神に祝ひ、富士に社を構へ、曾我両社八幡宮と崇むべき由、駿河人岡部權守泰綱を奉行とし、両社御造営有之。

四 曾我関連の行事・狂言

(1) 曾我祭

江戸歌舞伎の年中行事。江戸では三座とも正月に曾我狂言をだすのが通例で、大入りで五月まで続演することができると、曾我兄弟の仇討の五月二八日に曾我祭を行なった。もと楽屋で行なわれていたが、宝暦頃から舞台上で俄風(にわかふう)の総踊りをみせた。しかし寛政六年(一七九四)華美の咎(とが)で禁止された。

(2) 曾我物

曾我兄弟の仇討に取材した戯曲。「曾我物語」から派生したさまざまの逸話は、室町時代の能・幸若舞を経て、一七世紀中頃以降浄瑠璃で流行し、遅れて歌舞伎でも行なわれた。歌舞伎においては追善の性格が強く、元禄期以降上方では益狂言として吉例化した。とくに江戸では五郎の荒事、十郎の和事の演出のほか、さまざまの定型場面をうみ、江戸時代を通じて最大の戯曲系統であった。

昭和二十二年四月の東劇は幸四郎・三津五郎・時藏・宗十郎の合同、それに羽左衛門・梅幸加入での興行。

私のノートには「菊・吉病氣不出演によって団菊祭お流れ、狂言の立てかえ再度に及び、混成一座にて開演」とある。その第一部の第一が「花競劇錦絵」で、石段より大磯曲輪外の場まで。石段は染五郎（のち八代幸四郎）と田之助との立ち回り。暗転で梅林模様場になり、五郎・舞鶴・工藤がセリ上がり、だんまりあって暗くなり、浅黄幕をふり落とすと駕籠から十郎が出、そこへ禿・太鼓持ちが出て文を十郎に渡す。十郎が花道にかかり文を開くのがキツカケで下座で「やぶのうぐいす」。この時の五郎は広太郎（のち大谷友右衛門、現中村雀右衛門）が戦地から復員してのお目見得の役。十郎は三代目時蔵。十郎のひっこみに長唄「五郎」の二上り「やぶのうぐいす」とはなぜか、と思ったのは、当時すでに私が「五郎」の稽古を唄・三味線ともにしていたからであろう。昭和二十五年十月の東劇は「団十郎文化切手発行記念」と冠した興行で、第二部の第一に「十二時會稽曾我」三幕、富士裾野工藤対面より狩場討入まで。が出た。近松門左衛門原作のものを明治中期、福地桜痴が改作、活歴化したもので、工藤は三升、十郎は海老蔵、五郎は猿之助、大磯の虎は羽左衛門、化粧坂の少将は福助であった。討入の場で雨戸をあけてばんばりをかざし合図を送って兄弟を助ける役が喜瀬川の亀鶴、梅幸がつとめた。

(3) 常磐津「勢獅子」

本名題「勢獅子劇場花籠」、嘉永四年（一八五二）四月五月初日の中村座大切に上演されたもので、作者は三代瀬川如臯。この所作事を四月興行に出したことについては、外題の角書に、「曾我両社の祭礼も臯月の空を魁けて」とあり、曲中に「今日噂さは春ごとに、虎少将のその名さへ、幾夜か此処へ通ふ神、もつれた酒も解け合せて、祐成さんの殿ぶりに、欺されて咲く室の梅。」のようにあり、さらに夜討ちの模様を洒落れた筆致で面白おかしくまとめ、所作事になっている。語ってみて実に面白い筋付けであり、手付けである。次にその詞章をひく。

「夫れ建久四つの臯月闇、念なう父の仇がたき、歩みの板までさし通す、後陣は雨のつれづれに、英気を養

ひ盛る酒に、オットちりから、ちつたッぼう、舞ひうたひ、おもては閃めく太刀長刀、そりゃこそ御狩が始まった。急くな者ども、怪我すな遊女。りんき大平、さそくの兜、えものは三味線、どんちゃん、音に驚き裾野の猿が、三番ふみく逃げ出す鹿へ飛び乗る曲馬、コリヤくくくくえいとうとう目ざましや。」

「りんきおひら」は、「臨機応変」のしゃれ、「三番ふみふみ」は三番叟を舞う足どりにかけたもの。

私の見た所作事の「五郎」で印象にあざやかに残っているのは、昭和二十三年七月の東劇での「根元草摺引」における六代目菊五郎の五郎。この時の朝比奈は猿之助。昭和二十五年六月の東劇での「雨の五郎」、七代目三津五郎である。

(4) 曾我の対面

歌舞伎狂言。曾我兄弟が父の敵の工藤祐経に初めて対面する場面で、享保期頃から、江戸では毎年初春狂言の中で組み入れるのが慣例となった。各座でさまざまな演出が行なわれたが、明治期に河竹黙阿弥の台本、九代市川団十郎の演出で定型ができた。めでたい儀式的な内容、歌舞伎独特の人物類型、華やかな衣装、台詞・鳴物の技巧、様式的な演技によつて江戸歌舞伎の古格を伝える。

私が観た最初の対面は昭和二十二年二月の東劇、尾上菊五郎・坂東三津五郎・松本幸四郎、合同大歌舞伎と銘打った興行で羽左衛門・梅幸・家橘の襲名披露が行なわれた。第二部の第一が「寿吉例曾我」（対面）で、工藤は七代幸四郎、十郎は菊之助改め七代梅幸、五郎は家橘改め十六代羽左衛門、朝比奈は七代三津五郎、八幡三郎は又三郎改め十六代家橘、近江小藤太は松緑、鬼王が海老蔵（のち十一代団十郎）、化粧坂の少将は福助（現芝翫）、大磯の虎は男女蔵（のち左団次）であった。六代菊五郎は素のなりで出てさっぱりとした口上を述べた。

次の対面は昭和二十三年十一月の東劇、芸術祭公演、顔見世興行大歌舞伎と称する興行。工藤は幸四郎、十

郎は七代宗十郎、五郎は猿之助（のち猿翁）、朝比奈は海老蔵、虎は三代目時蔵、少将は訥升（のち八代宗十郎）であった。

「対面」という芝居の下敷きらしき物を『曾我物語』に求めると、巻第四に「箱王、祐経にあひし事」がある。場面は箱根権現社、ここに修行していた箱王は頼朝の二所権現参詣の供をしている祐経を討とうとして身辺に近づく。箱王の存在を知った祐経は招き寄せ、左の手で箱王の肩をおさえ、右の手では髪をかきなでて言葉をかける。その言葉は実にやさしい。抄録しよう。

「御分の父河津殿とは、従兄弟子なり。見たてまつれば、昔の思ひいでられて、今さらあはれに存するぞ。いそぎ法師になり、別当につきたまへ。弟子おほしといふとも、祐経ほどの方人もちたる人あらじ。便宜をもつて、上様へも、よきやうに申し、寺門の訴訟あらば、申し達すべし。今より後は、いかなる大事なりとも、心をおかず、おほせられよ。かなへたてまつるべし。」などと言ひ、懐中から赤木の柄に胴金を入れた腰刀を取り出して与え、「里くだりのついでには、わ殿の兄十郎殿とうちつれて、来たり候へ、かへすべし」と言つて席を立つ。

祐経の本意がどこにあるのかはわからない。しかし、こうした祐経が「対面」の工藤につながっているように私は思う。狩場の通行切手を兄弟に与え、「切手、切つてうらみを晴らせよ兄弟」と「対面」の工藤は言うのである。

五 大磯をたずねる

曾我兄弟の物語にかかわる旧跡の類は数限りなく多く、関東地方のみならず長野県・広島県・福岡県・佐賀県、さらには能登半島の北端にも及ぶ。『謡曲ゆかりの古蹟大成』に木本誠二氏が掲げた写真は百三十葉である。

私は「濡れてくるわの化粧坂、名うてと聞きししょうしょうの・・・かよいかよいて大磯や」にこだわって



慶覚院本堂

大磯だけをたずねた。

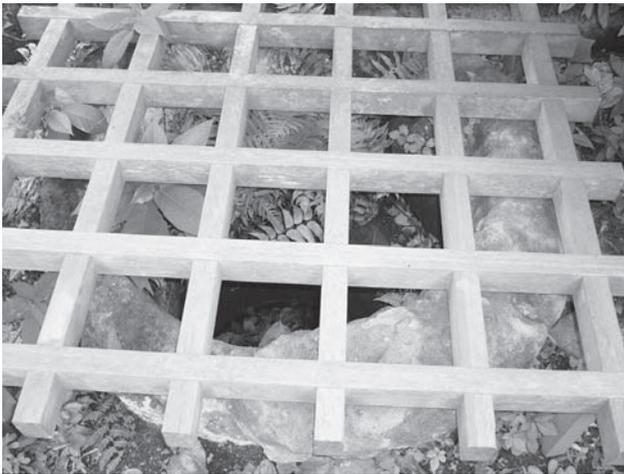
(1) 慶覚院

新しく建てかえられていて美しい。本尊千手観世音菩薩をはじめ諸像はすべて補修中の由、院主秦良淳師の示されたものに次のようにある。

地藏菩薩は延命地藏菩薩にして遊女虎が持念仏にして（中略）今より七百八十九年余り昔の作像なり。虎御前の法名は法虎妙恵禪尼なり。この地藏菩薩は丈四尺九寸にて御腹籠りには曾我十郎祐成の持尊仏にして弘法大師の御作なりと伝う。

(2) 化粧坂

東海道本線と平行して走る国道一号線を大磯から平塚方面へ向かい、長者町といい、かつては宿の中心部であったであろうことを思われる町を過ぎ、本線をこえて旧道と一つになるあたりが化粧坂であり、バス停もある。このあたりは松並木も残り、一号線右手には化粧坂公園もある。化粧坂といっても鎌倉のそれとは全く趣きを異にする。鎌倉のは切り通しの急坂である。大磯のは坂とは思えないほどなだらかである。鎌倉の昔はどうであったかは知らない。十郎は曾我から山越えをして虎に会いに通ったのだそうだ。旧道の松並木の入口あたりに虎が化粧の水を汲んだと伝える井戸がある。標識などもあるが尋ねる人も多くはないのであろう、荒れている。



化粧の井戸



延台寺山門と石碑



虎御石の説明



虎御石、延台寺

(3) 延台寺

寺伝によれば、兄弟の死後、虎はここに法虎庵を結び、高麗寺の地藏堂に日参して兄弟の霊を慰めたとされる。境内正面に法虎庵曾我堂がある。「虎御石」^{とらごいし}は、子宝に恵まれなかった大磯の宿の山下長者に、虎池弁才人が夢枕に立って虎の誕生を予言した、その時、枕元に置かれていたのが虎御石であり、石は虎の成長とともに大きくなり、一三〇キロの石になった。また虎を訪れていた十郎を刺客が襲った時、十郎の身代わりになったとも寺伝はいう。



鳴立庵境内



虎の像、鳴立庵

(4) 鳴立庵しぎたつあえ

西行の「鳴立つ沢の秋の夕暮れ」で知られる鳴立庵境内にも「法虎堂」があり、中に虎の木像が安置されている。

父祖の同族葛藤の犠牲を一身に引き受けて、悲しくも厳しい宿命を負わされ、仇討だけのために生を享けたような曾我兄弟の物語に、一抹の彩りを添える十郎の愛人虎の伝説は大きく展開して、その古跡の類は全国におびただしい数にのぼっている。大磯は虎伝説の発生の地といえようか。

結び

なんの結論もない雑稿であることは例年の通りである。もし提言できることがあるとすれば、詞章をまずそらんじ、稽古本から目をはなし、師匠の口の動きを見、師匠の声よりも大きく、声をいっばいに張って唄うこと。洒落ようとせず、五郎の胸の内にあるかも知れない何かを、吹き払うように唄うべきだ。それは初心者、熟達者の別はなく、老若・男女の別もない。「若さ・躍動・恋の歓喜」が曲の命である。

長唄「五郎」考察

後記

今回も羽山裕氏の集められた資料、稀音家義丸師所蔵の正本類をもとに稿をすすめた。

紀要第一号に「鳥羽の恋塚」を書いてから二十年、神田外語大学も創立二十周年を迎えた。一年一曲の割合での長唄曲考察も「五郎」で二十曲。そのうち十四曲についてはまとめて「長唄びいき」（平成十四年、青蛙房）となった。物語の舞台を求めて宮崎・紀州・出雲・丹後・木曾・京・福島・赤穂と回わり、多くの友を得、便宜を与えられた。今もなお交際が多くの人と続いている。

「紀要」への寄稿者もふえているという。外国語学部の紀要にふさわしくない私の雑稿の掲載を認めて下さった歴代の紀要委員会の委員の方々に御礼申し上げて、紀要への寄稿は「五郎」をもって区切りとする。

それに平成十九年九月五日、長唄東音会五十周年記念演奏会に天皇陛下・皇后陛下のお成りがあり、私が御先導と御休所・観覧席での「綱館」の解説を申し上げる機会を得た。お聞きいただけただけという自負を持ってたところ、長唄考察にひと区切りつけるのもよい記念になるかと思つてのことである。

参考資料

- | | | |
|--------------|--------|-------|
| 日本伝奇伝説大事典 | 乾克己ほか編 | 角川書店 |
| 曾我物語（古典文学大系） | 市古貞次校注 | 岩波書店 |
| 謡曲ゆかりの古蹟大成 | 木本誠二 | 中山書店 |
| 日本史広辞典 | 編集委員会編 | 山川出版社 |
| 古語大辞典 | 中田祝夫編 | 小学館 |
| 江戸語事典 | 三好一光編 | 青蛙房 |

- | | | |
|---------------|---------|-------|
| 日本音楽大事典 | 平野健次ほか編 | 平凡社 |
| 近世邦楽年表 | 東京音楽学校編 | 鳳出版 |
| 曾我物語 | 坂井孝一 | 山川出版社 |
| 長唄・新稽古本「時致」 | 吉住小十郎編 | 邦楽社 |
| 歌舞伎年表 | 伊原敏郎編 | 岩波書店 |
| 近松浄瑠璃集(新古典大系) | 松崎仁ほか校注 | 岩波書店 |